

まえがき

2018年2月、世界中の人々が注目する中で平昌^{ピョンチヤン}オリンピックピックが開催されました。私は1980年のレークプラシッドオリンピックピックからずっと、フィギュアスケートというスポーツを愛してやまない観客です。そんな私にとっても、平昌オリンピックピックのフィギュアスケート競技は、生涯忘れ得ぬ素晴らしい内容であり、結果でした。

2017年11月のNHK杯の公式練習中に右足にケガを負い、NHK杯を含めたその後の試合をすべて欠場した羽生結弦^{はじゆうづる}は、平昌オリンピックピックに「ぶつつけ本番」で挑み、皆さんもご存じの通り、ショートプログラムとフリーの両方で見事な演技を披露しました。

そして、ソチに続いて見事な金メダル獲得。男子シングルにおいて、アメリカのデイツク・バトン以来66年ぶりのオリンピックピック連覇です。

羽生結弦は、2018～19年シーズンも競技を続行してくれています。その決断がど

れほど重く、尊いものか。それなりに長くフィギュアスケートを見続けてきた者として、私は深く受け止めています。

平昌オリンピック開幕の1か月ほど前、『羽生結弦は助走をしない 誰も書かなかったフィギュアの世界』（集英社新書）を出版しました（以降は『羽生結弦は助走をしない』という表記にさせていただきます）。私が感じる「羽生結弦のスケーティングの素晴らしさ」や「羽生結弦のオリジナリティあふれるプログラムの構成。それを可能にした成長ぶり」を中心に、フィギュアスケートというスポーツの素晴らしさを書いたつもりです。

今回、あらたに執筆する機会をいただいたこの本では、平昌直前からオリンピック本番、そして「競技者」として臨む今シーズンの羽生結弦の姿、その演技にフォーカスをあてていきます。私が見たものを見たままに書き記しつつ、その演技の「奥」にあるものを考察していきたいと思っています。あわせて、今シーズンの注目選手たちの素晴らしさについても、なるべく詳細に書いていきます。

2017年の終盤から2018年の終盤にかけてのことが中心にはなりますが、40年近いフィギュアスケート観戦歴のすべてを込めるつもりです。「私にとって、これは本当に

大切」と思うことであれば、『羽生結弦は助走をしない』の中ですすでに書いたことであってもいまだ一度言及するかもしれませんが、何とぞご了承ください。

過去の名選手たちの「これはぜひご覧いただきたい！」という演技もご紹介しています。読者の皆様が後で検索できるよう、その選手の名前と該当する大会名を英語表記で加えています（5ページ未満の間に同じ選手のことを取り上げる場合は、名前は省略）。日本人選手については、該当する大会名だけ英語表記を加えています。

また、現役を引退されたスケーターには敬称をつけていますが、そのスケーターの現役時代のことを語る際には敬称を外していることをお許しく下さい。

『羽生結弦は助走をしない』において、私は「自分をフィギュアスケートライターとかスポーツライターと自称するつもりはない。それらの肩書きには、ある資格が必要だから」という意味のことを書きました。いまでもその気持ちは変わっていません。

スポーツに対する知識や感受性、打ち込んでいる選手たちへの敬意、そういったものをきちんと伝えられているかどうか……。それらの有無はすべて、読者の方々のご判断にゆだねました。

今回はそれらに加え、次のことを意識して書き進めようと思います。

選手それぞれの美点をそれぞれに感じて、自分なりの言葉で文章化すること。

選手たちを雑なカテゴライズでくくらないこと。

読者の方おひとりおひとりの感受性や美意識を何よりも尊重すること。

自分の考えを、押しつけるのではなく、読者の方々にひとしずくの刺激を与えられるようなものを目指すこと。

読者の方々の「心の万華鏡」に、ひとつ色石を加えたら、また違った美しさが生まれるような、そんな文章を目指すこと。

これらのことができているかどうか、読み終わった後でご判断いただければ幸せです。フィギュアスケートという素晴らしいスポーツがますます発展することを何よりも祈っています。